

平成 21 年度 託麻西小学校 校内研修計画

1 研究主題

主体的にかかわり、分かる喜びを味わう学習活動の創造
～算数科における言語活動の工夫を通して～

2 研究主題設定の理由

(1) 教育の今日的課題から

今、日本の教育は変革の時代を迎えている。OECDのPISA調査等を通して学力低下問題が問題視されている。これらの諸問題を受け、新学習指導要領が発表され、今年度より、その移行期間としての実践が始まった。また、世界同時不況が深刻さを増す不安な国際情勢の中、これからの社会を担う子どもを育てる教育の真価が正に問われている。このような社会情勢の激変の最中であって、子どもに本当に身につけさせたい学力とは何なのか、それをどう身につけさせたらよいのか、子どもの心と身体の問題にどう取り組むかが検討課題である。

今回の学習指導要領改訂の根幹には、義務教育の目的（教育基本法）で、「社会において自立的に生きる基礎を培うこと」が明確にされたこと、および、理数教育の充実が図られたことがある。また、言語活動や体験活動の充実が重要視され、とりわけ「基礎的・基本的な知識・技能とともに思考力・判断力・表現力等をはぐくむために、教科において、観察・実験、レポートの作成や論述などの知識を活用する学習活動を充実するため」、知的活動やコミュニケーション、感性・情緒の基盤となる言語活動の充実が求められている。

(2) 本校の教育目標から

本校の教育目標は「自らの未来に夢を抱ける子どもの育成」、めざす児童像は「やさしく」「かしこく」「たくましく」である。児童が算数科の授業の中で、学び方を身につけ、さまざまなかかわりを通して自分に自信を持ち、学習が楽しいと感じられれば、児童は、学校生活や未来に明るい展望を持ち、夢を抱くことができるであろう。

また、さまざまなかかわりの中で、支え、支えられていることを感じ、たくましく生きていく力を身につけることができるであろう。よって、本校の教育目標につながるものとする。

(3) 児童の実態から

全国学力・学習状況調査によると、国語のB問題は市平均を若干上回っているものの、国語A、算数A・B問題は市平均を下回っている。つまり、算数科の基礎・基本の定着と自分の考えを表現する力が不十分である。また、学力検査においても、その傾向がうかがえる。算数の領域の中でも、全体的に「量と測定」領域が他領域より落ち込んでおり、体験的な活動も不十分であると考えられる。

児童の日常的なコミュニケーション能力が低いために、トラブルになったり、言葉が乱暴だったりする姿が見られる。活動に関しては指示待ちで、自分で考えて主体的に活動することが難しい児童もおり、決められたことは言えても、相手に何かを伝えるときに必要なものを使い、筋道を立てて自分の考えを述べる力は不十分である。

以上のことから、今後の教育に算数科の果たす役割は大きい。算数科において、児童が基礎・基本の力をしっかりとつけ、主体的にかかわりながら学び、自分の考えを自分らしく表現していく力をつけることが重要であると考え、本主題を設定した。

3 研究主題について

「かかわり」とは、「もの、ひと、こと」にかかわることと考える。「もの」とは学ぶ対象（教材等）にかかわること（思考）、「ひと」とは自分の考えを説明し他の考えを聞いてかかわること（伝え合い）、「こと」とは獲得した学びを生かしてかかわること（活用）と捉える。

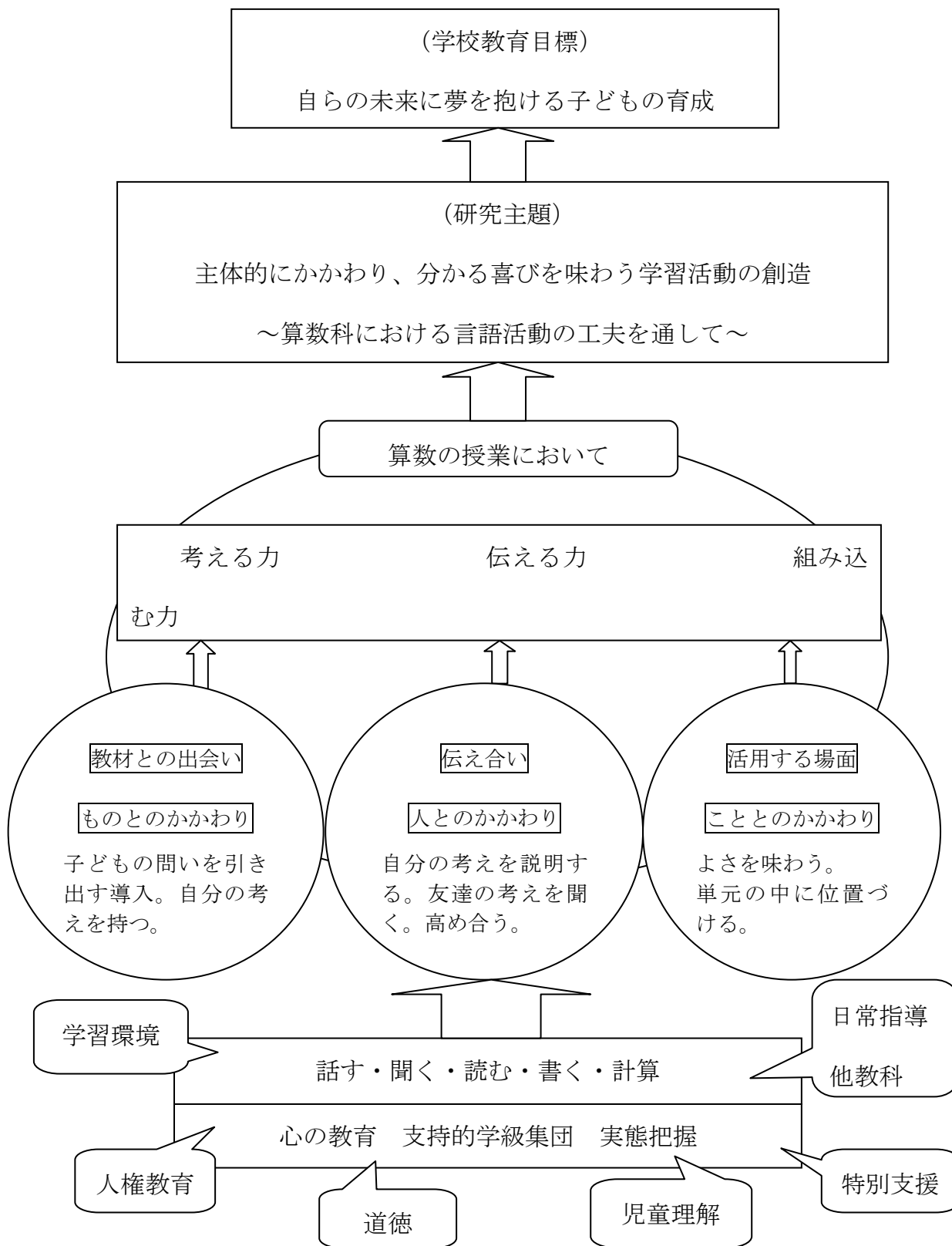
「分かる喜びを味わう」とは、新しい知識や考えを得る喜び（習得）、習得したものをいかす喜び（活用）と捉える。

「算数科における言語活動とは」、思考力・判断力・表現力等の能力を育成するために不可欠な学習活動として、「言葉、数、式、図、表、グラフを用いて考えたり、説明したり、互いに自分の考えを表現し伝え合ったりするなどの学習活動」と捉える。

4 研究の仮説

基礎・基本を明確にし、かかわり方や言語活動を工夫した授業を行えば、主体的に学び、分かる喜びを味わう学習活動が創造できるであろう。

5 研究構想図



6 研究の視点

視点1 学習過程の工夫

単元の指導計画や学習過程を工夫し、基礎・基本を明確にし、学び方を身につけさせ、主体的に学習する力を育成する。

- ① 習得・活用の時間の工夫
- ② 見通しをもって主体的に取り組むための工夫

視点2 かかわり方、言語活動の工夫

算数の授業において、学年系統を考えたかかわり方や言語活動を工夫し、考える力、伝える力を育成する。

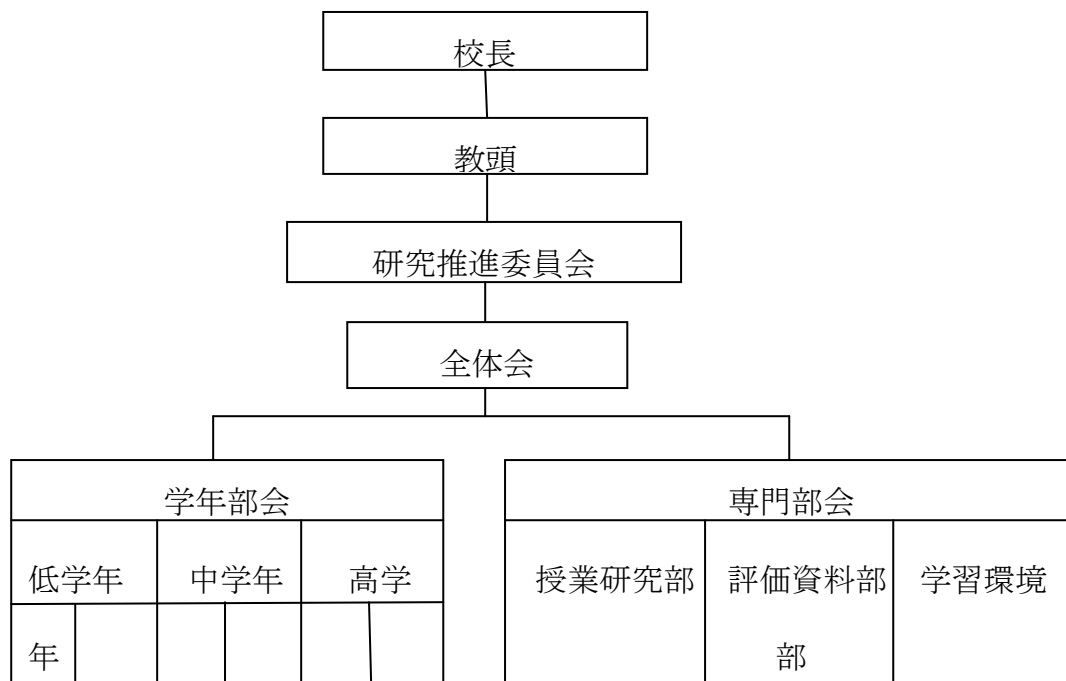
- ① かかわり方の工夫（教材・場・学習形態など）
- ② 言語活動の工夫

視点3 評価活動の工夫

自分の伸びや友達のをさを認められるような評価活動を工夫し、自分に自信をもち、意欲を高める。

- ① 実態把握
- ② 自己評価・相互評価
- ③ 教師の評価

7 研究組織



(学年部会)

- ① 各学年：年間計画把握（軽重をつけた取り組み）、研究の具現化（実態把握、つきたい力、具体的実践など）、研究授業の話し合いなど
- ② 低・中・高学年：授業研究会（事前、事後含む）の司会、記録するなど

(専門部会)

- ① 授業研究部：各学年の系統（言語活動、かかわり方）、授業についてなど
- ② 評価資料部：実態調査、スキルプリントなど
- ③ 学習環境部：学習環境整備、家庭学習、学習訓練、話し方・聞き方等の統一など

8 授業実践にあたって

- ・ 大研4回（みどり含む）、中研3回、それ以外は小研を行う（一人一授業）。
- ・ 各学年で重点単元を設定し、研究授業（大・中・小）に取り組む。
- ・ 授業のポイントを明確にして実践する。